

A市の地域子育て支援拠点事業に関するフォーカス・グループ・インタビュー結果報告  
事業改善と利用者評価の実施を目指して -

滋慶医療科学大学院大学 小野セレスタ摩耶 (5205)

キーワード：地域子育て支援拠点事業、フォーカス・グループ・インタビュー、利用者評価

## 1. 研究目的

本研究は、A市の地域子育て支援拠点事業（以下、本事業）についてフォーカス・グループ・インタビュー（以下、FGI）の手法を用いて利用者（保護者）に調査をすることによって、（1）調査結果を今後の事業・サービス展開に生かすこと、（2）本事業の利用に共通する視点を把握し今後の本事業の利用者評価のための評価質問紙項目に生かすこと、の2点を目的としている。

## 2. 研究の視点および方法

### 【研究の視点】

地域における子育て支援の充実を図る施策はこれまで様々に実施されてきており、子育て支援の拠点づくりが推進されてきた。平成19年度からはこれらの流れに児童館の活用も加わり、新たに地域子育て支援拠点事業として再編され、身近な場所に親子で集まって相談や交流がしやすい環境づくりの推進が行われている（厚生労働省、2007）。A市においても、“中学校区に一つ”をめざし拠点事業拡大の努力が行われており、現在中学校8校に対し6か所が設置されている。しかしながら、これら拠点事業を利用している利用者（保護者）の生の声を聴く機会、利用者による評価の機会はまだ設定されていない。また、これまでの発表者の研究から、子育て支援サービスの利用者にはある程度共通するサービスや事業を評価する視点があることが明らかとなった（小野、2011）。そこで、本研究では利用者の生の声を聴く手法としてFGIを採用し、研究の目的に述べた2点を明らかにすることとした。

### 【研究の方法】

（1）調査方法：利用者へFGIの手法を用いて調査を実施した。FGIとは、量的調査では得がたい参加者の生の声を聞くことのできる手法である。また、1対1のインタビューでは得られない「積み上げられた情報」、「幅広い情報」、「ダイナミックな情報」を得ることができる（安梅、2001）。近年ヒューマンサービス領域でニーズ把握や事業評価、サービス開発等に幅広く使われている手法である（安梅、2001）。

（2）質問内容：質問内容は 利用動機、利用してよかったこと、利用してよくなかったこと・改善点、サービスを選択する上で重要と考えていること・要望、である。また、FGI終了後、協力者の属性等の情報収集のため簡単な質問紙調査を実施した。

（3）調査対象・場所および時間と調査期間：調査対象は、A市内6か所で実施されている本事業のうち、ひろば型、児童館型からそれぞれ1か所を選択し、それぞれ15名を目標に利用者をリクルートした。各1時間から2時間程度、各事業が実施されている場所で

調査を行った。調査期間は2010年8月から9月初旬である。

(4) 分析方法：まず、インタビュー録音データを全て逐語録に落とし、次に、逐語録に観察記録の内容を追記し、録画記録も確認してインタビューデータを補強した。逐語録、観察記録、録画記録を合わせて一つインタビューのデータとして扱い分析を行った。インタビューデータをそれぞれ分析し、各事業の結果を出すと共に、2つのインタビューデータに共通する内容を利用者評価質問紙試案に活用する。分析は、FGI手法に基づいて内容分析を実施した。分析の過程で観察者(2名)によるチェックを行い、インタビュー実施者及び観察者2名の合計3名の合意が得られるまで繰り返し分析を行った。

### 3. 倫理的配慮

調査協力者の方々に、本調査の趣旨・目的などを十分説明し、合意を得た上で参加していただいた。また、個人情報保護に細心の注意を払うこともあわせて約束し、承諾書に署名を得た上で実施している。収集したデータの取り扱いにも細心の注意を払っている。

### 4. 研究結果

(1) 属性：調査協力者は、ひろば型10名、児童館型12名であった。すべて就学前の子どもの母親であり、いずれも核家族であった。母親の年齢で最も多かったのは、30-34歳であった。また、母親のほとんどが無職であった。

(2) FGI結果：いずれの質問内容についても大きく【母親にとって】【子どものために】の2つが最も大きな共通したカテゴリーとなった。「よかったこと」として2か所に共通していたのは、【母親にとって】【子どものために】共に「友だちづくり」であった。【母親にとって】では、「他の母親と話す機会」や「気持ちの変化」、「子育て・子どもの成長の見通し」などであった。【子どものために】では、「異年齢構成の集団による変化・成長」が共通点であった。また、【環境設定】では、「場のサポート体制」が共通していた。「改善点」では、「広報」、「スペース」の問題が共通点であった。「サービス選択で重視すること」では「アクセス」、「雰囲気」が共通していた。さらにこの他、子育て当事者としての子育て支援サービスへの具体的な提案も抽出された。

(3) 考察：今後は本結果をもとに本事業目的等を再度勘案しつつ事業改善と行っていく必要がある。また、「サービス選択で重視すること」で共通した項目については、利用者評価質問紙の項目に生かした上で、評価試行を行っていく。

#### 【主な参考文献】

安梅勅江(2001)『ヒューマンサービスにおけるグループインタビュー法 科学的根拠に基づく質的研究方法の展開』医歯薬出版

厚生労働省(2007)「地域子育て支援拠点事業実施のご案内」

小野セレスタ摩耶(2011)『次世代育成支援行動計画の総合的評価 - 住民参加重視の新しい評価手法の試み - 』関西学院大学出版会(2011年6月現在印刷中)

\*本研究は、2009年度全労済公募委託研究および2010年度日本学術振興会研究費補助金(若手B)(課題番号2730459)「次世代育成支援事業の利用者評価体制の構築に関する開発的研究(主任研究者:小野セレスタ摩耶)」の研究結果の一部を発表するものである。